

横須賀 トンネルマップ



Yokosuka Tunnel Map

横須賀のトンネルの魅力

横須賀はトンネルが多い町です。日本一と言っても過言ではありません。道路用だけでも10本以上、鉄道用も合わせれば150本は優に超えます。そして、横須賀のトンネルには個性的なものが多く、幅が狭いものや広いもの、高さが低いものや高いものといった形はもちろん、トンネルをつくる素材においても石や土から煉瓦、コンクリートまで、おおよそ全てが揃っています。その理由は明確で、横須賀のトンネルの建設された理由や時期が非常に多彩だからです。

横須賀の道路トンネルは、大きく4世代に分けられます。

第一は明治前半、横須賀軍港の整備にともない、観音崎や猿島の周辺につくられた軍事的なトンネルです。

第二は軍港都市として発展をはじめた横須賀の中で、特に交通が不便だった北部地区の住民たちが自ら団結して切り開いた、谷戸の奥とそれとの生活拠点を結ぶトンネルです。

第三は、大正末から戦前にかけてますます都市化していく横須賀と、横浜や逗子などの周辺地域を広域的に結ぶために建設が進められたトンネルで、その多くが自動車の通行を想定してつくられました。現在も横須賀の主要な道路網を構成しています。

第四は、戦後から現在に至るまでの間に、より快適で安全な都市生活や、観光のために建設された多彩なトンネルです。横浜横須賀道路のトンネルや谷戸同士を結ぶ各種防災トンネル、歩行者専用のトンネルなどが含まれます。

また、道路用、鉄道用のほかに、当初は水道用としてつくられたトンネルが、道路用に転用されて役立っているのも横須賀の大きな特徴といえます。

そして、これらの歴史的で個性的な多くのトンネルが、今もそれぞれの地域に根ざして現役で活躍しています。それこそが、横須賀のトンネルの一層の魅力といえます。

平沼 義之氏
千葉県松戸市に生まれる。
TV出演で注目を集めている废墟＆隧道爱好者、フリーライター。

WEBサイト「山行がね」主宰。隧道同人誌「日本の廃墟」を仲間と立ち上げるほか、「廃道本」と「廃道をゆく」シリーズの著作(共著)などを多数手がけ、最近は、廃道や隧道をテーマにしたトークイベントやツアーガイドも行っている。

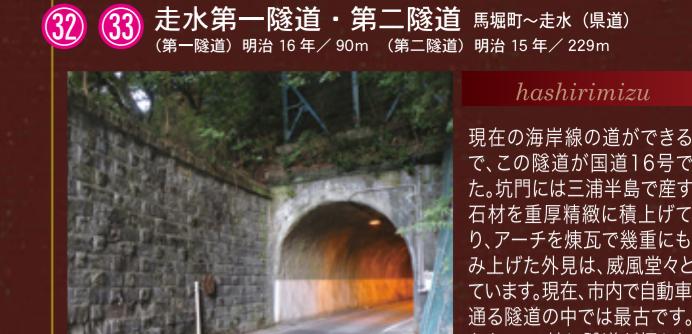
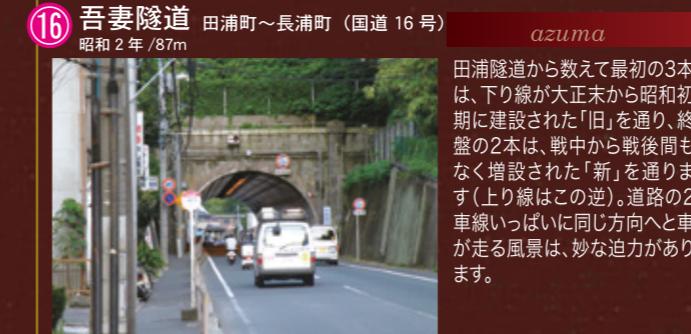
文・監修: 平沼 義之

発行 横須賀集客促進実行委員会
(事務局) 横須賀市経済商務観光課 046-822-8124

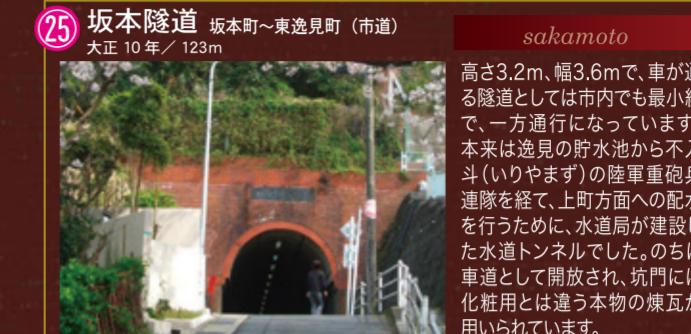
協力 国土交通省横浜国道事務所・神奈川県横須賀土木事務所・

横須賀市観光ボランティアガイドの会・永富謙

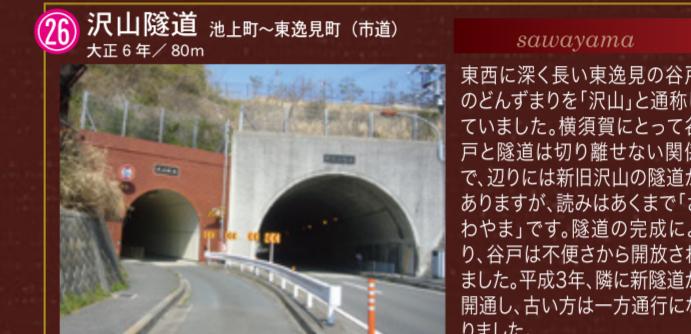
平成25年10月発行



現在の海岸線の道ができるまで、この隧道が国道16号でした。坑門には三浦半島で産する石材を重厚精緻に積上げており、内部は黒と薄暗さが混じるムードがあります。また、坑門と交差するように全国でも珍しい凹型の隧道です。横須賀駅側から入ると下り勾配となり、京急線汐入駅と見送り駅の間にある踏切と交差。これが隧道内では一番低く、潮満時には海面とほぼ同じ高さになります。地下水が漲りやすいため、揚水ポンプ室があります。



現在は最も古い水路隧道として利用されています。元々は水路隧道で、馬堀町へ導くための水路隧道として作られました。当時は途中に明かり塔があるこの長い素掘隧道(320m)で、サイズも人が通れる程度だったそうですが、開通から20年ほど経過しているが、現在は県道規格の環状線の一部として利用されています。車両は上り一方通行。薄暗い隧道ですが、まちの温もりや歴史に根ざした不思議な安らぎを感じます。



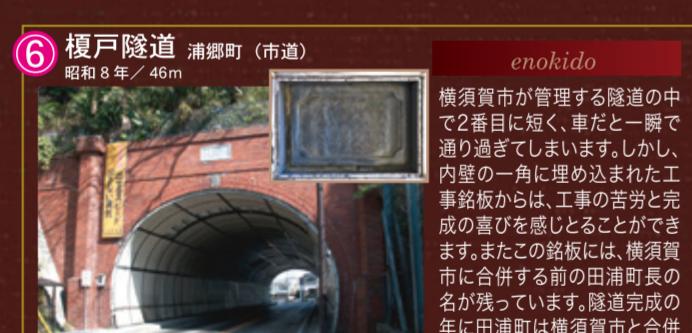
日本最初の洋式灯台として知られる観音崎灯台のほぼ西側に位置する隧道で、休日ともなれば多くのビジャーが訪れます。しかし、これは觀音崎砲台の関連道路として秘密裏に建設されました。壯麗な磚瓦の明るい姿は、その様な過去を微塵にも感じさせません。



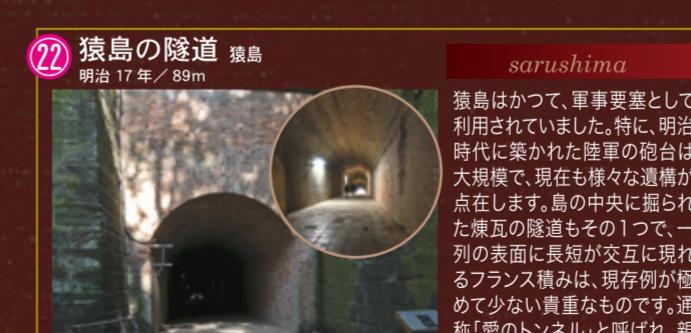
観音崎の海岸線をめぐる歩道にある素掘隧道で、市内最古の隧道です。江戸幕府は、黒船の来襲に備え、嘉永5年に陸東町の鶴居(現在、海上自衛隊の敷地)へと観音崎台場を移しました。その際に兵員や弾薬の通路として、ここを陥落させた跡が残っています。



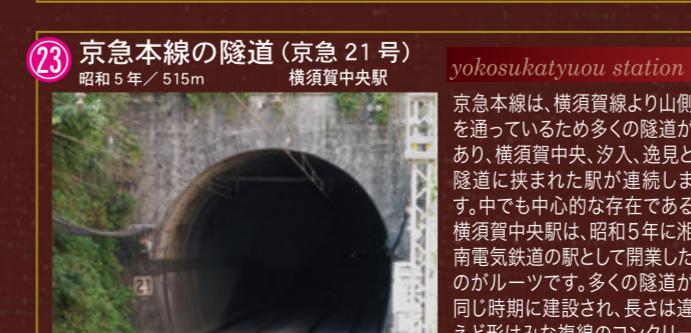
観音崎第三砲台の通路として建設された小規模な隧道で、内壁のアーチ部分の小窓み、側壁や坑門のイギリス積み、坑門アーチの不思議な構みなど、多彩な磚瓦の積み方を見ることができます。現在も28サンチ榴弾砲の砲座があり、隧道は信号機による交通整理でその役目を果たしています。



坑門のコンクリートブロックは、全國的に珍しい白と黒の市松模様になっています。また、隧道の西側の土留め石壁にも同様の模様で施され、煉瓦からコンクリートへの素掘過渡部にあって、煉瓦に負けないような美しい配色が感じられます。現在は隣に新鶴居隧道が建設されたため、一方通行となっています。



江戸時代燈明堂(浦賀港に出入りする船の目印)が置かれた燈明崎の付け根にある隧道で、現在は立てたまま隧道から海上に見えません。隧道の隣には、道路拡張によって川間隧道ができ、多くの隧道が並び、通称「めがねトンネル」と呼ばれていました。



平六隧道と並んで狭小な隧道で、坑口は無造作なコンクリート張りですが、内部は黒と薄暗さが混じる獨特のムードがあります。また、戦前には、海軍の練習生たちが通じて訓練を行ったことから、「海軍トンネル」の異名もありました。市が覆いを被る北口と、海上に面した住宅地の明るい南口との対比が印象深い隧道です。

